

スケッチによる空間採集

モノの積み重ね

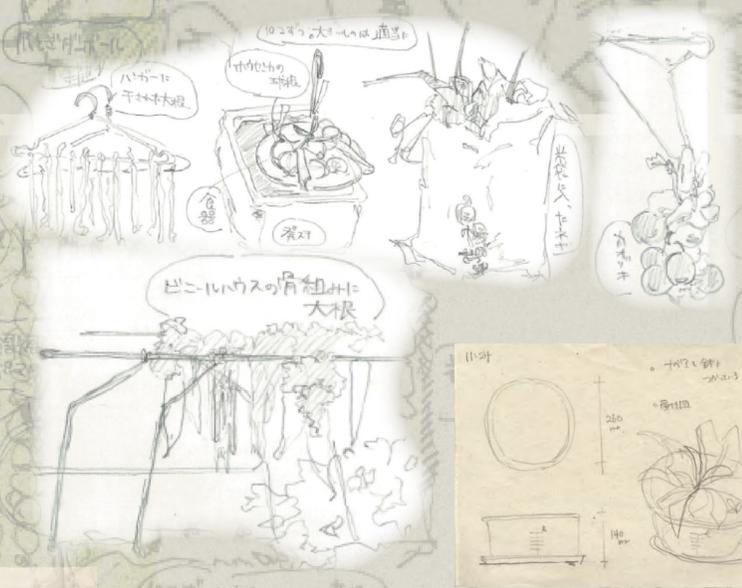
「モノの積み重ね」は、祖母がつくる雑然とした風景の重要な要素となっている。祖母が多くの時間を過ごし、寝室としての用途も兼ねている居間では、「水槽の上に植木鉢」「窓辺の棚に重ねられた演歌のカセットや園芸、漬物関連の雑誌」、「園芸関連の雑誌、演歌の歌詞を書き起こしたものの、ジップロック」「和紙のロール、重要書類、祖母が出かける際に使うハンドバッグ」といったモノが重ねて置かれている。以下のようなメモ書きがモノの隙間に差し込まれており、祖母が一人で育てている庭や植木鉢への愛着、趣味に対する探求心がうかがえる。

積み重ねられたモノ一つ一つを注視すると、まとまりごとに大まかな用途やカテゴリーに分けられていることが分かる。例えば、居間では園芸や演歌など、祖母の趣味に関するメディアが、小屋やサンルームでは調理器具や畑作業の道具、もう使わなくなったものが置かれている。そこには、雑然とした風景の中に潜む祖母の合理性が感じられる。

ベレックは年月を経て積み重なった私物を「自身の財産」と表現した。^{*11} 今回の調査を通して、筆者は雑然とした風景に魅力を感じ、その中から祖母の財産を抽出したと言えるだろう。

機能の喪失、そして再構築

「機能の喪失、そして再構築」とは、元々の機能を逸脱し、祖母なりの使い方をしていることを指す。本調査では、「干し柿が吊るされた物干し竿」や「ハンガーに干された大根」がみられた。特に、この特徴は植木鉢に顕著に表れている。観察した植木鉢 131 個のうち、9 個に祖母の「機能の喪失、そして再構築」がみられた。また、受け皿がある植木鉢 93 個のうち、18 個が食器やプラスチックのトレイ、角盆などを受け皿として代用していた。このように、祖母は一度使わなくなったものを自分の仕事や趣味に合わせて機能を再構築し、再び活用している傾向があった。「機能の喪失、そして再構築」は、赤瀬川による「老人力」の「諦める力」が影響していると考えられる。



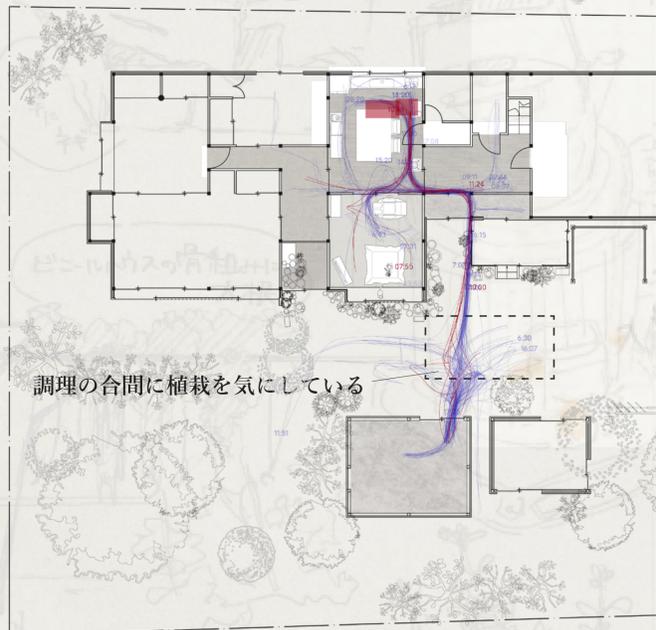
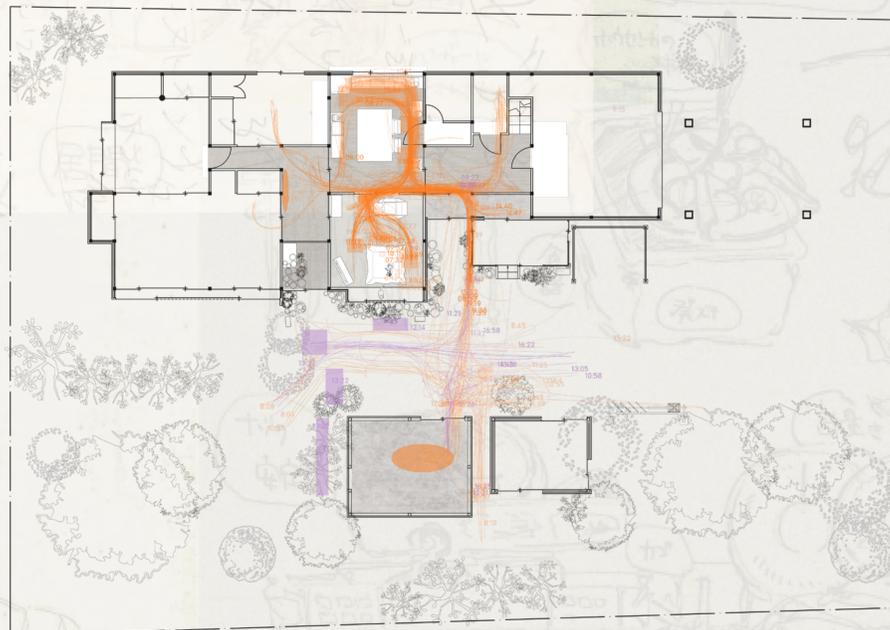
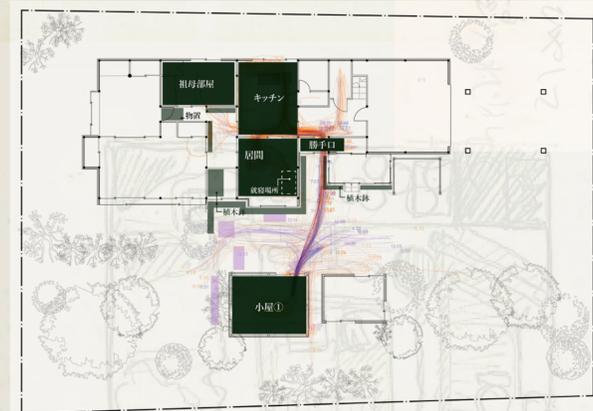
祖母のシルエット

動作のスケッチでは、筆者が「祖母らしい」と思う動作を採集したが、結果を振り返ると祖母のシルエットや服装に目が行く。祖母は、畑仕事や料理をするときにはキャップの上にほっかむりを重ねて着用している。畑仕事の際には野良着を、料理の際にはエプロンを着ている。また、寒い時期に出かけるときや雪かきをするときには、上着のフードを深く被っている。筆者が魅力的だと感じてスケッチした祖母の姿は、丸みを帯びたシルエットが特徴的であった。かわいらしいフォルムではあるが、それとは対照的に、たくさんの藁を片手に持って畑に向かう姿や、キッチンと小屋を何度も往復してかぼちゃまんじゅうの乗ったお盆を運ぶ姿、雪が多く降った日には早起きして車通りの多い道まで雪かきをする姿がある。

このように、丸みを帯びたフォルムと行動のパワフルさにはギャップがあり、小原一馬の研究とつながるものを感じる。小原が提唱した旧来の高齢者像としての「人類の最終到達点としての賢者」というイメージにも近いものを見出せる。また、祖母の畑仕事や料理に対する真剣な姿勢や、自身の好きなことに対する態度を「無邪気であり、一生懸命である」と解釈するならば、小原と同様の結果が得られたといえるだろう。



日常を描き出す動線調査



9月14日から12月10日の期間において、15日間の祖母の行動記録をパス化した。^{*12} その結果、調査した日のほとんどが同じような傾向を示していることがわかった。特に、祖母はキッチンと居間を頻繁に往復していることが明らかになった。さらに、移動の際には右側の通路を通ることがほとんどであり、これには右側の通路が祖母の滞留しやすい場所になっていることが影響している。時期を問わず、祖母はお茶を飲みながら新聞を読んだり、テレビを見たりしており、その際には猫がストーブで暖を取りながら祖母に撫でられる姿も録画で確認された。また、かぼちゃまんじゅうの生地を成形する際にも右側の通路が使われており、自然と祖母の行き来が頻繁になっていることがわかった。

母屋の出入りの際には、必ず勝手口が使われている。玄関は勝手口よりも奥に位置しており、祖母だけでなく家族全員が普段から勝手口を利用している。その結果、本来の用途でほとんど使われない玄関は現在、植木鉢置き場となっている。屋外に置ききれないものや寒い時期に移動された鉢が並べられ、ストーブで暖を取るように配置されている。玄関内から扉までの通路は確保されているものの、植木鉢を運ぶ際に使われるのみである。

今回の調査では、明確な目的を持って行動している記録に加え、行動の合間に植木鉢や庭を気に掛ける様子が動線に現れていることも確認された。たとえば、かぼちゃまんじゅうを小屋で蒸している間や粗熱を取っている間に、ふらっと植木鉢や

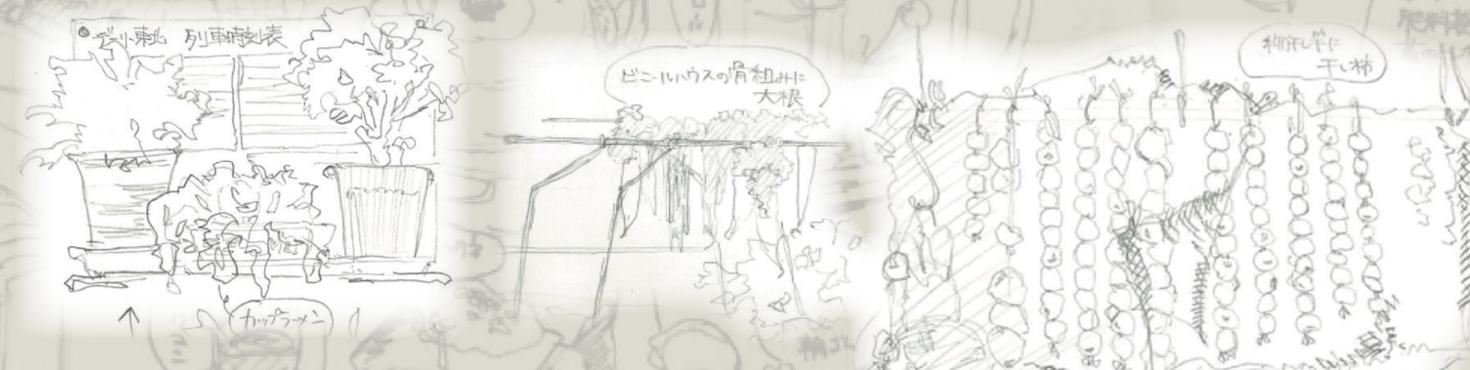
庭の方向に立ち寄り、水やりや草むしり、植木鉢の移動をしている姿が見られた。植木鉢が特に集まっている玄関前や庭に滞留する時間は長くはないものの、常に気にかけている様子が特徴的である。主に祖母が足を運ぶのは起床後や日中であり、実家に住んでいた頃にはあまり見られなかった。この姿から、祖母の植物に対する深い愛着を再確認することができた。

^{*11} ジョルジュ・ベレック、さまざまな空間、p54-55
^{*12} 北雄介、武田裕之、「外部空間における人間行動の記録と分析—外部空間の連担した郊外住宅地「サトヤマヴィレッジ」の研究（1）」(2018)での行動記録を参考に行った。

本調査では、祖母の生活の基盤となっている「小屋」や「庭」、地域文化に根付いた料理、そして祖母が頻繁に使用・制作するものを中心に調査を行った。収集したデータによると、「使用年度（使用を開始した、または入手した年）」が20～40年前のものが多かった。これは祖母が定年退職した時期と重なる。また、祖母が所有する物や、祖母しか使わない空間における人間関係についても調査を行ったが、「八戸の郷土料理である『豆しとぎ』の作り方や植木鉢以外は『全部一人で行っている』『家族で使う人が変わっている』『人間関係は特くない』といった回答が得られた。修理歴に関しては、使用年数が長いものが多いにもかかわらず、「今まで壊れていないので修理していない」「穴が開いたら自分で修繕する」といった回答があった。

長い時間をかけて少しずつ自分の空間をつくっていく姿は、祖母の行動のパワフルさに通ずるものがあるだろう。またその姿勢は料理においても発揮され、その行動が地域との関りや周囲の人間関係の構築につながっている。

祖母はモノに対して独自の愛称はないものの、長年使い続けた愛着があると感じられる。しかしながら、毎日のように使い続けているため「好きなどころがある」というよりは「毎日使う当たり前のもの」という印象が強い。筆者が感じる「祖母のモノに対する愛着」は「祖母の当たり前」なのかもしれない。



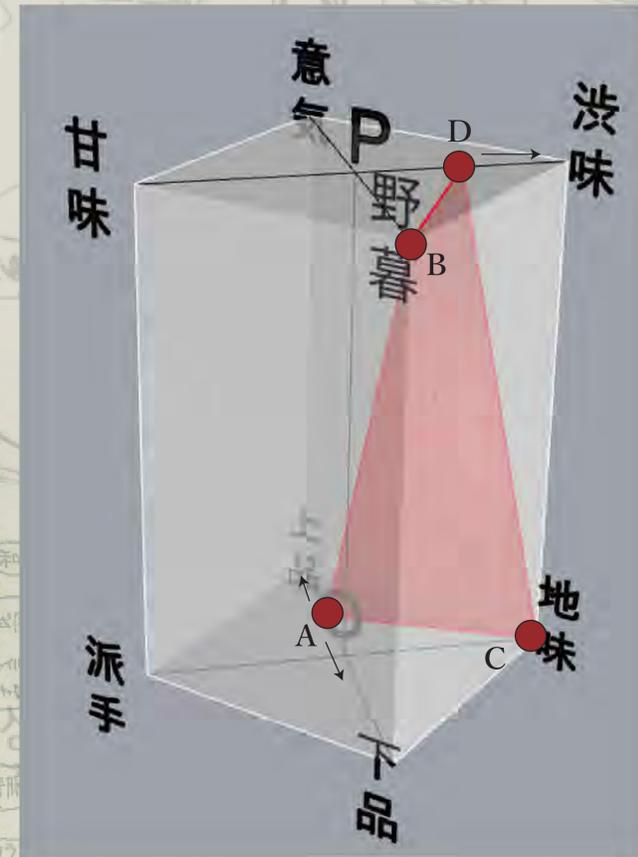
モノが纏う祖母の老人力

機能が再構築されたものには、祖母の「もう、いいや。」*13 という考えが色濃く反映されている。この言葉は文面だけでは冷たく感じられるかもしれないが、筆者はこれを祖母の仕事や趣味に対する無邪気な姿勢から来るものだとして捉えている。ここで改めて「機能の喪失、そして構築」について考えたい。機能を喪失するとは、物の一部が損失したり、経年劣化によって元々の用途で使われなくなったりして忘れ去られた状態を指す。

例えば、実家の敷地の端はビニールハウスの骨組みが置かれている。筆者はその骨組みにビニールがかけられ本来の用途で使われた姿を一度も見ることがない。そのため、敷地の隅に追いやられた存在感の薄いその骨組みを筆者は「祖母のもの」というよりは「忘れられたもの」と認識している。しかしながら、祖母はその機能に新たな才能を見出し、「大根を干す竿」として再構築した。祖母の融通無碍な思考*14 が骨組みに新たな存在意義を与えた。

また、基礎に沿って所狭しと置かれたサイズの異なる植木鉢の中には、鍋や灰皿の受け皿が紛れ込むように置かれており、雑然とした空間をさらに複雑にしている。これらは経年劣化により「老人力」を帯びており、祖母独自の風景を形成しているが、その風景は同時に赤瀬川が示す日本独自の文化を体現しているといえる。無意識に配置されたように見える植木鉢の中に、祖母が「侘び寂び」に無意識に近づく姿勢が垣間見える。

さらに、ベレックの「積み重なった一つ一つが財産である」という考えは、赤瀬川が提唱する「老人力」、すなわち「もう、いいや。」と諦める力によって形成された風景に通じるのではないだろうか。実家の風景こそがベレックの「財産」である。



九鬼の「いき」が現す祖母の魅力

九鬼は「いき」に関する主要な意味とそれぞれの対立関係を示している。本研究では「上品⇔下品」「派手⇔地味」「意気⇔野暮」「渋味⇔甘味」のそれぞれの頂点間における、点の位置や運動に重きを置いて分析を進めた。

上品—下品における点 A

「上品⇔下品」を実家の生活空間に適用した場合、このような雑然とした風景は「上品」ではないものの、九鬼の示すような反価値性は感じられない。*15 ここでは赤瀬川の「老人力」を考慮に入れる必要がある。赤瀬川によれば、「老人力」とは物体や人物にマイナスの力が作用し、その結果として独特の味わいが生まれることである。*16 この「マイナスの力」は経年劣化や使用感に表れるものであり、先述した祖母の物品に見られる特徴とも一致する。赤瀬川の理論を九鬼の「いき」の構造に適用すると、この「マイナスの力」は、物品が九鬼の立体における座標上で反価値的な方向に向かう運動の要因として解釈できる。「上品⇔下品」を祖母の趣味や人間性に適用したとき、祖母の趣味や行動には小原が示す「老人の賢者のイメージ」や、「無邪気で一生懸命な姿勢」が含まれる。この精神的な特徴は「上品」と捉えられるだろう。以上のことから、祖母の魅力を形成する点 A は単純な「上品」でも「下品」でもなく、その中間点、あるいは両者を行き来する運動の中にあると考えられる。

意気—野暮における点 B

「意気⇔野暮」では、「意気」は九鬼が示す「いき」の構造そのものを表しているようにも見えるが、本調査においては、祖母の風景に見られる「野暮ったさ」や「垢抜けていないさま」が特に印象的であった。祖母の作り出す経年劣化したモノや雑然とした風景は、先述した「下品」や「地味」といった要素と結びつき、独自の価値を生み出している。また、九鬼が「意気」において示す「世態人情に通暁すること」*17 という要素に照らして考えると、祖母は自分の好きなことに対して「無邪気な姿勢」や「一生懸命な姿勢」を持ち、それに基づく経験と知識を有している。ただし、これらの知識や姿勢は外部に向けられる「対他性」を持たず、常に自己完結的な「対自性」の姿勢をとっている。この点が、九鬼が本来想定している「いき」の構造、男女関係を中心とするものとは異なるため、消極的で否定的なものとして捉えられる。

しかし、本研究では、祖母のこのような「対自性」の姿勢がむしろその魅力を増幅させていると考える。植物への深い愛着や、調査時に感じた祖母の職人気質は、九鬼が肯定的に捉える「意気」とは逆の性質を持つかもしれないが、筆者にとってはその点こそが祖母の魅力を実際立たせる要素であると感じられた。以上のことから、点 B は九鬼の立体構造における「野暮」と重なる位置にあると考えられる。

派手—地味における点 C

「派手⇔地味」では祖母の空間は「地味」だと言えるだろう。スケッチによる調査で特徴的であった「機能の喪失、そして再構築」や「積み重ね」は、長い年月をかけて形作られたものであり、祖母の人間性を強く反映している。「地味」という言葉からは、一見して特徴がなく、取り上げる価値がないようなありきたりなものを指す印象を受けるが、考現学では、そうした当たり前の中にこそ価値が見出される。祖母の生活においてモノが老人力を纏う様子は対自性が強く、着飾ろうとする意志は見えない。朴素な地味には一種の「さび」が現れ、「いき」のうちの「諦め」に通じる可能性を持っている。*18 ここでも「諦め」という要素が現れるが、これは赤瀬川による「老人力」の概念とも関連する。以上のことから、祖母の魅力形成する点 C は、九鬼の立体における「地味」と重なる位置にあると考えられる。

渋味—甘味における点 D

「渋味⇔甘味」では祖母の趣味における姿勢が判断材料となる。それぞれ、他人との交渉を避ける、他者に甘える態度を指している。*19 祖母における「渋味」とは、「なんでも自分でやり遂げる精神」や「自分の好きなことに対する無邪気な姿勢」として現れていると言える。他者との交渉を避けるという冷たい表現は祖母には似つかわしくないが、一人でやり遂げる姿勢は、九鬼のいう「渋味」に通ずるものがあると考えられる。九鬼は、「渋味」と「甘味」の対立関係は直線的であり、消極的な対他性の方向に向かう際に「いき」を経由して「渋味」に至る道が存在することを指摘している。*20 この観点から考えると、祖母の作り出す風景や構築された人間関係には、この「いき—渋味」の運動が適合していると解釈できる。「渋味—甘味」における点 D は、九鬼の立体構造の中点 P から「渋味」に向かう運動を示していると考えられる。

以上を踏まえると、九鬼の立体内で祖母の魅力は上図のような三次曲面を形成する。

*13 赤瀬川原平、老人力、p200
 *14 同上
 *15 九鬼周造、「いき」の構造、pp38-39
 *16 赤瀬川原平、老人力、pp142-146
 *17 九鬼周造、「いき」の構造、p41
 *18 同上、p40より引用
 *19 同上、p44
 *20 同上、p46